



わたしの研究 ⑤③

テーマ

出会いに支えられた研究

本研究所嘱託研究員

吉村 千恵

(タイ研究・地域研究・障害学)



3つの出会い

私がタイと、障害者と、学園大と「出会って」はや20年になります。今の私の基盤をなす3つのものと同時期に出会い、現在学園大で教鞭をとって

いることは不思議です。

私の専門は地域研究ですが、地域研究とは何かとよく聞かれます。地域研究のおもしろさは、何でも研究の対象となり様々な視点から地域を紐解いていく点にあると思っています。人間も、動物も、歴史も、政治も地域を研究する糸口になります。また、なぜタイなのかともよく聞かれます。最初のきっかけは、中学生の時に母親に1週間ねだり買ってもらったココナッツの果汁がとても残念な味で、大学生になったら南国に行き熟れた本物を飲んでやると決意したことです。そして学園大の入学前に読んだ新聞にタイの農村で小学校建設のスタディーツアーの小さな記事を見つけました。もう一つ、長い間障害者の活動にも関心をもっており、両方とも入学後すぐに連絡しました。

学園大学生の時代

その後、学期中は障害者の活動に参加し夏休みなどにはタイの山岳地域や農村を訪れるという生活が始まりました。当時の日本（熊本）では、重度障害者の地域生活を保障する制度は不十分で、ノンステップバスや低床電車の導入もまだでした。毎日のように介助保障やバリアフリーを求めて運動する障害者や施設や家族のもとを出て街で暮らす障害者たちから障害とは社会環境なのだと学びました。

一方で、タイの農村で暮らす障害者たちは、私が日々出会う日本の障害者とは対照的に映りました。「社会に求めるものはたくさんある！」と言いながらもどこかのんびりと過ごす障害者たち。解放された空間やコミュニケーションの雰囲気は不思議でした。私にとって日本の障害者たちが「動」と写るとしたら、タイの障害者たちは「静」でした。単に移動手段や社会保障の問題ではなく、社会として障害者の存在への感覚や包摂の方法が違うのだと感じました。その違いへの興味が私の研究課題の第一歩となりました。

東南アジア地域研究へ

タイの研究をするなら、年単位でタイに長期滞在して研究してみたいと思っていた私に、当時私の指導教官だった花田昌宜先生が京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科へつづく道を紹介してくれ、最終的に速水洋子先生に指導をお願いすることができました。この時出会った先生たちの研究室にあった東南アジア各国の本や資料そして写真が印象的でした。地域研究をするにはタイだけではなく広く東南アジア全体についても学ばなければいけないんだとわくわくしました。

地域研究では、その地域と深く関わりなが

ら中長期の調査を実施しデータを集めることが第一歩です。仮説の実証のために都合の良い情報だけをとらないように、まずは地域に沈み空気のような存在になって地域の人々から本音が出てくるのを待ち、そこからわき出てくるデータや説（理論）を求めるように習いました。しかし、実際に生活を始めて3ヶ月ほどして空気のような存在になることがいかに難しいか思い知りました。

調査中の日々

調査期間2年半のうち約2年間は障害者たちが共同で暮らす事務所の二階に間借りしていました。彼らと日々を一緒に過ごします。しばらくすると互いに遠慮がなくなりました。いつ情報が飛び出すかわからないので自由時間があってないような毎日の中で比較的自由な時間がある朝のパンとコーヒーが一日の楽しみになりました。地域の人たちは、私のお財布の中身や日本での生活が気になります。「日本の給料や障害者年金はいくら？」「飛行機のチケット代は？」「その鞆は？」「日本には障害者が乗れるバスがあるんだってね」「日本の車いすがカッコいいのはなぜか」など、タイ人は私より好奇心旺盛だと思えます。

色々な関心や質問（干渉）は、コミュニケーションとしては嬉しいものの、生活していると苦しくなってきます。また、運動の方針にも意見の違いが出てきます。調査をしているはずの私が介助者として期待されることも増えました。ある日、空気のように生活するなんて無理だと思い至りました。タイ人同士でも相互作用があって暮らしているのに、外国人の私が共にいるのですから相互作用があって当たり前です。むしろ、影響を与えずに調査をさせてもらえると欲していたことが傲慢

で、本音のデータがほしければ私も本音でぶつかるべきだと反省しました。タイで購入したものを身につけ、タイで髪の毛を切り、肌の色もこんがりきつね色が定着し、日本の「にょい」が消えた頃には関係が少し変わり、生活や調査も充実してきました。

出会いからもらった宿題

結局、そのような日々のやりとり（相互作用）の積み重ねが私にとって大事な時間であり調査の過程であり、論文の中でも大事なデータとなりました。今思うと、あのような豊かで濃い長期調査はもう出来ないと思います。喜怒哀楽に満ちた調査期間中、調査ノートには書ききれない経験やデータを得ることが出来ました。それらのデータを基に論文を書いたり、新しいことに取り組んだりしています。未だに、あの頃の貯金（体験）で暮らしているような気すらします。

私を指導してくださった先生方、私と向き合いいろいろな話を聞かせてくれ、体験させてくれたタイの人々、彼らとの出会いがなければ研究者というより一人の人間として成長することもなかったと感じています。

20年前学園大学に入学したからこそ、ここまでの出会いがありました。私の場合、研究の積み重ねというより、好奇心と出会いの積み重ねによる「今」だと思っています。しかし、果たして彼らの恩義に報いるだけの成果を私は出せているのか、彼らの生活やタイ社会から学んだことを私は生かしているのか、今でも自問自答しています。筆舌には尽くしがたい貴重な時間の分だけ重い宿題を得た気がしています。この宿題には時間がかかりそうですが、これを臥薪嘗胆として研究を続けていきたいと考えています。